ロンドンエッセイ　44

小野 あずさ

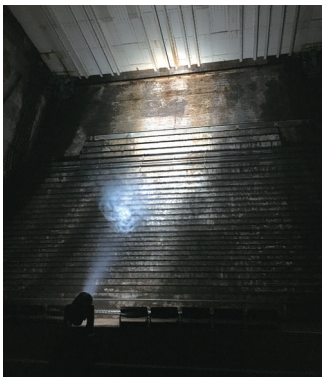
タワーブリッジの地下空間

ロンドン橋落ちた～落ちた～落ちた～♪と歌いながら、テムズ川に架かる豪華なタワーブリッジを渡る観光客を目にします。タワーブリッジがあまりに見応えがあるため、タワーブリッジをロンドン橋だと勘違いする人が多いようです。ロンドン橋は実際、何度も掛け直され、見た目はとても地味ですが、千年の歴史をもつ、愛され語り継がれてきた橋だそうです。それに比べ、タワーブリッジは百年ほどの歴史はあるものの、ロンドン橋よりは大分、若い橋ということになります。大きな船が通るたびに、橋上の道路を通行止めにし、橋が真っ二つに割れ上がる、いわゆる“跳ね橋”のタワーブリッジは、ロンドンの有名な観光名所です。

数日前に行われた、東ロンドンのアートイベント“Art Night”では、このタワーブリッジの地下空間が、会場の一つとして使われました。Bascule Chamber（バスキュール・チャンバー）と呼ばれるこの地下の空間は、タワーブリッジが開き上がるとき、橋をテコの原理+電動で押し下げる空間なので、通常橋が閉まっているときは、ぽっかりと空いた空間になります。タワーブリッジのコントロール室から観客は入り、細い螺旋階段をずっと降りていくと、古い寂れたレンガに囲まれた巨大な空間にたどり着きます（オペラ座の怪人が、地下の世界へ女性を連れ去る映画シーンが蘇るようです）。その地下の空間は、テムズ川は見えないものの、外部の船や車の音が微かにこもって聞こえ、レンガの裏側に流れる川の存在と湿度、異空間、心地よい寒気さを感じさせます。何よりの見モノは、橋の動きに沿って建てられた、古く美しいレンガ壁／階段で、半比例カーブを描きながら、高い天井に続いています。まるで30段の巨大な、ひな壇を眺めているようです。残念ながら、その地下空間で、橋が降りてくる瞬間を見学することは、危険なので禁止されていますが、半円を描いた壁のカーブを見ているだけで、その橋が降り迫って来る迫力が感じられます。普段、一般公開されていないこの空間は、あまり人には知られておらず、公のイベントでこの空間が使われるのは、今回が2回目だそうです。

アーティストのイアン・ウィットルシー氏が、この空間で創りあげる音響照明インスタレーション作品”Becoming Invisible（見えなくなる）”の照明デザインを、今回担当させていただきました。大まかに説明しますと、作品の長さは20分間、深呼吸と睡眠術師による瞑想的なナレーションのサウンドスケープが流れ、その深呼吸にシンクロして、一灯の照明も深呼吸するといった作品です。「7秒かけて息を吸い、7秒かけて息を吐く、ゆっくりゆっくり白を吸って、ゆっくりゆっくり赤を吐く」という感じで、口から吸って吐く色を（イメージの中で）ゆっくり時間をかけてシフトしていきます。次は緑、次は黄色といった感じで。アーティストの要望で、照明は寒色系の白のみ。照明で色は表現せず、色は観客にイメージしてもらうという方向性です。息を吐きながら、灯りを吐き出すように照明がゆっくりつき、息を吸うと、照明が体の中に吸い込まれるように消えていくという演出です。吐き出す色（イメージ上の色）がシフトされるたびに、光量も変化させていきます。呼吸は常に一定のスピードなので、光量が上がるキューと下がるキューをループし、色がシフトするたびに、音響さん（Qlab）からタイムコードベースのOSC信号を送ってもらい、次の光量のキューループをトリガーさせるといった具合にプログラムをしました。そこまでは割と単純なプロセスなのですが、一番時間がかかったのは、キューのカーブの作成でした。微妙な光量の違いによって、カーブも微妙に変えていかなければなりません。人間の呼吸のスピードと質量を、音と照明で表現することは、とても興味深いものがあります。吸い始めてから吐き出すまでの暗転カーブ、そしてその逆のピークを、いかに自然に、ふんわりともっていくかが挑戦でした。ETC Ionで、すでに存在しているカーブをコピーして、何種類ものカーブを作り、試してみました。直に数字で打ち込んで、なめらかなカーブを作ることは、意外と難しいものです。カーブも、エフェクトを作るときと同じように、マウスでお好みの曲線を描けるものなのでしょうか？

開き上がるタワーブリッジ



タワーブリッジ地下空間のレンガの壁

この呼吸の演出に使った灯体は、Vari*Lite VLXというLED wash moving lightです（もう製造はされていないそうです）。タングステンでしたら、カーブがもっと緩やかに作れたのかもしれないので、できればタングステンがよかったのですが、限られた電源容量だったということと、パワフルで柔軟性のあるものという条件だったので、この灯体を使うことに。1%から2%への光量の飛び具合に、後々悩まされましたが、なんとかカーブと、目に残る残像のリズムで乗り切りました…。

クライマックスでInvisible（見えなくなる／透明になる）瞬間に、ストロボを一度だけ強烈にフラッシュするというタスクも、はじめはMartinのAtomicを4台仕込みたかったのですが、電源容量の理由で、LEDの選択を余儀なくされました。悲しいことにAtomic LEDはWest Endの公演で、どこの機材会社もストックなしということだったので、SGMのX5ストロボを4台試し、パンチが効かなかったので、P5を6台追加してのクライマックスになりました。余談ですが、X5のルーメン情報がどこにも見当たらず、SGMに直接問い合わせても、ルーメンを教えてくれなかったことには、少し驚きです。ジェネレーターの話は、プロダクションのはじめのほうで出ましたが、予算の関係上、却下されました（泣）。

橋を開けてほしいというリクエストは、24時間以上の通知をすれば、どの船もできるらしく、公演日の数日前に予約が相次ぎ、公演時間の変更が数回ありました。1日12回公演、ブリッジ上げはその間に4回行われました。ブリッジ上げがあるたびに、機材を安全な位置に移動しなければならなかったので、この会場はイベントには向いていないと、誰もが思ったと思います。それでも一度は見る価値のあるタワーブリッジの地下。ロンドンの隠れざる面白い空間です。